
幽遊白書～刹那の炎～

コーンマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽遊白書～刹那の炎～

【Zコード】

N7419A

【作者名】

ローンマン

【あらすじ】

幽遊白書の勝手な続編です。かなり好みが出ますがあしからず。てか評価されねえ！評価してくださいm(——)m文句でもいいから

1・審判の門（前書き）

「人の手説を読んで……誰もが回りに手を廻らひでしゃ……」

1・審判の門

仙水との闘い…そして魔界統一トーナメントより2年後…

靈界

全ての生と死を司る世界

…「ツ…「ツ…

靈界の中枢・審判の門へと歩くひとつの影があった

門番鬼A

「なに用か」

門番鬼B

「現在審判の門は解放されておらぬ。火急の用事ならば我等が聞こ

う」

「…」

「…」

門番鬼A

「用件が無ければ去るがよい」

「…」

「…」「エンマを出せ」

門番鬼B

「…『ヒノトマ』様は現在会議中である。出直すが良し」

？？？

「ここから『ヒノトマ』に取りつけ…」

男は少しイラついた様子だ

門番鬼B

「…よ、よかね…お主の奴は…」

男の尋常でない妖気に門番は気付いていた

？？？

「…飛影」

門番鬼B

「ひ、飛影だと？お主があの邪眼師・飛影か…お…」

門番鬼A

「あ？ああ…」

やつらと門番鬼のひとつは審判の門へと消えて行った

飛影

「じばし待たれよ」

門番鬼B

「じばし待たれよ」

数分後…先程の門番が帰ってきた

門番鬼A

「飛影殿！失礼いたしました！コーンマ様が自室にてお待ちです。どうぞお入り下さい」

門番鬼B

「開門！…」

…「ガガガ…」

門番が叫ぶと巨大な審判の門が徐々に開いてゆく

飛影

「…ふん」

…「コッ…コッ

飛影は不機嫌そうな顔で門へと消えていった

門番鬼B

「あれが有名な邪眼師・飛影か…」

門番鬼A

「うむ…広大な魔界でもその名は漫透しているらしいが…」

門番鬼B

「しかしS級妖怪が靈界に…それもコーンマ様に何用なのか…」

門番鬼A

「…それがどうやらコーンマ様が飛影を呼び出したようなのだ」

門番鬼B

「コホンマ様が？妖怪関連のトラブルならば浦飯幽助が居るではな
いか」

門番鬼A

「うむ……全へコホンマ様は句をお考へなのか……」

1・審判の門（後書き）

ね？思つたでしょ？「会話が多い」って（笑）

2・『食事』（前書き）

あいかわらず余話しかねえ！

2・『食事』

「Hンマ白塗

ガチャツ

「Hンマ

「来たか」

飛影

「…」

部屋では「Hンマが座っている

「Hンマ

「まあ座れ

飛影

「なんの用だ」

「Hンマ

「…」

飛影

「妖怪関係の事件なら幽助を当たれ

「Hンマ

「…妖怪関連ではあるが…ワシがわざわざ飛影…お前を呼び出したのには理由がある」

飛影

「セツセツと皿」

「ハンマ

「実はな…最近妖怪による『食事』が靈界・人間界問わず多発しておる」

飛影

「…」

「ハンマ

「ワシの側近がな…妖怪の姿を見たのだ…」

飛影

「何が言いたい?」

「ハンマ

「その妖怪は…長い銀髪に氷のよつた冷たい目をした妖狐らしいのだ」

飛影

「…」

「ハンマ

「靈界では魔界以外での妖怪による『食事』を禁じてこる。それが魔界・靈界の唯一の条約だ」

飛影

「蔵馬は二シゲンを喰らつタイプの妖怪じゃない」

「コソンマ

「んなコトは百も承知じゃ！しかし靈界は完全に藏馬をマークしておる」

飛影

「ちつ！…それで俺にどひしると言つんだ」

「コソンマ

「つむ。飛影、お前には魔界から事の真相を探つて欲しい」

飛影

「…ちつ」

「コソンマ

「すでに幽助は人間界から調べている。これ以上の被害が出るようなら特防隊に要請がかかるやもしれん」

飛影

「藏馬を狩る氣か？」

「コソンマ

「ワシだつて藏馬が犯人だなどと思つておらん！しかしワシひとりの力では靈界の全てを抑えるコトはできんのだ…飛影、時間はないぞ」

飛影

「……クソが」

「ダツ！…」

飛影は審判の門を飛び出し、魔界を田指した…

「…藏馬…」

2・『食事』（後書き）

会話小説しか書けません！（笑）

3・人間界（前書き）

やつと幽助登場（笑）

3・人間界

人間界

幽助

「こんな調子で真犯人なんて見つかんのかよ」

ぼたん

「うるさいねー。黙つて妖氣探りな」

飛影がコーンマに呼び出される数時間前、幽助もぼたんに『食事』事件について説明されていた。そして今は藏馬の無実を証明するため、人間界で『食事』が行われるのを待っていた。

幽助

「へいへい。つたく……藏馬もめんじくセーハトに巻き込まれたもんだ」

愚痴を「ぼしつつも幽助は藏馬を信じ、邪悪な妖氣を探り始めた。

ぼたん

「そうだね……。」

二人はさらに集中していく……と

???

「浦飯い——ツ」

汚い声が響く

幽助

「桑原！」

ぼたん

「藏馬は？」

桑原

「ダメだ！藏馬のヤローー！」一週間家にや帰つてねえみてーだ。母ちゃんも心配してたぜ」

幽助が事件を聞いてすぐ、桑原も捜査に加わっていた。

ぼたん

「…そうかい」

桑原

「俺あ藏馬の高校に行つてくるぜーあやーいや海藤がいるしな」

海藤といつのは仙水事件の時の仲間であり『禁句』の能力を持つ藏馬の同級生である。

幽助

「ああ、頼む」

桑原

「任せとけ。浦飯！オメーはしつかり真犯人見つけやがれ」

そう言ひ去る桑原

ピリリリリ

幽助・ぼたん

「！？」

ピコリリリ

ぼたん

「靈界テレビだね」

幽助

「コーンマかー。」

靈界テレビを開くと案の定コーンマの姿

コーンマ

「幽助。たつた今飛影が捜査に加わったぞ」

幽助

「飛影が？…そつか、アイツも藏馬の事になると動くしかねーもん
な」

コーンマ

「つむー飛影には魔界側から調査してもらひ。お前は引き続き人間
界の調査、及び藏馬の所在を明らかにしてくれ」

幽助

「ああ」

ぼたん

「……」の妖氣は…幽助！

幽助

「……」

「……出やがったな！！行くぞぼたん！」

邪悪な妖気が満ちていく…

3・人間界（後書き）

ちょっとは会話以外の文章が増えたかな
…

4・遭遇（前書き）

空腹で調子が出ません（・ー・；）

4.遭遇

ぼたん

「近いよ！現在地から2キロ地点」

幽助

「おっしゃマ！先に行つてるぜ！」

ぼたん

「あ！幽助！」

ぼたん

「速」

すさまじいスピードで消えて行く幽助

：一分程走ると

幽助

「…近い！なんて妖氣だ…」

そのとき

女

「あやああああああ！」

幽助

「！？あつちか！」

幽助は声のした方へ向かつた

女
「イヤ…イヤあ…」

妖怪

「女：俺の血となり肉と化す事を誇りに思つがいい」

女

「は、放してえ！」

女は必死に逃げようとすると、その腕は妖怪に完全に捕えられている

妖怪

「さひばだ」

妖怪が女の頭めがけて口を開ける

女

「イヤあああああああ…！」

…と

妖怪

「ム！？」

ズドオツ！

まさに女が喰われようとしたその時。特大靈丸が妖怪めがけ放たれた

妖怪

「チイツー」

妖怪は女を投げ捨て、靈丸を避けよりと宙に舞つ

妖怪

「何者だ」

幽助

「何者だ…じゃねえん……そんな…まさか…」

妖怪

「…」

幽助

「く、藏馬！」

そこにいたのは長く美しい銀髪、白い装束を身にまとい、氷のよつに冷たい眼の妖狐…藏馬の真の姿そのものであった

妖怪

「…」

幽助

「…いやー藏馬なワケがねえ！テメ何者だー？」

妖怪

「…ククツ…俺だよ。藏馬だよ」

幽助

「嘘をつくなー藏馬は二ングンを喰つタイプの妖怪じゃねーハズだ」

妖怪

「ククク……今まで我慢してたんだ。しかし最近妙にハラが減つてね」

幽助

「ツーテメエ……蔵馬をビニにやつた！」

妖怪

「俺が蔵馬だつて言つてるだろ?……幽助」

幽助

「!/?なんで……俺の名前を……」

妖怪

「俺が蔵馬だからだよ……なんならもっと信用させようか?俺の人間界での名は南野秀一。母とその再婚相手、その連れ子がいる。」

幽助

「……誰から聞いた」

妖怪

「……相変わらず用心深いなあ……幽助。」

「……ついで信じるだろ?……そう言つて妖怪は道端の雑草を一本引き抜いた

幽助

「……まさか……そんなバカな……」

妖怪

「ククッ…」

藏馬？

「…な？」

なんと妖怪はただの雑草を鋭いナイフへと変化させた

4・遭遇（後書き）

最近妙にハラが減つてね

5・蔵馬？（前書き）

やつと闘い（笑）

5・蔵馬？

いつのまにか女はいなくなつていた

幽助

「植物の…武器化…」

蔵馬？

「そつ…」この能力こそが俺を蔵馬と証明する最大の証

幽助

「…本当に…蔵馬なのか…？」

蔵馬？

「最初からそつ言つてるだり…」

幽助

「…」

蔵馬？

「信じてもらえたかな？」

幽助

「…信じられねえな」

蔵馬？

「…ククッ…信じる信じないはお前の勝手だよ…今重要なのは幽助…お前が俺の邪魔をする氣なのかどうかだ」

幽助

「……俺は妖怪の『食事』を否定する気なんぞねえ。ただテメエが魔界に迷い込んだ二ングン以外を喰つてんのは条約違反だろ? 煙鬼のオツサンのメンツは守らねえとな……」

煙鬼といつのは、幽助の父・雷禅のケンカ仲間の妖怪であり『魔界統一トーナメント』の優勝者である。現在の魔界の統治者でもある

蔵馬?

「……煙鬼のメンツ? ククッ……それだけの理由で俺の邪魔をするといつのか?……くだらない……くだらなすぎる」

幽助

「……テメエみてえなカスが蔵馬をきどつてんなんてヘドが出る……つてのが一番の理由だよ!」

蔵馬?

「……それはあまり良い態度ではないな……死ぬぞ」

幽助

「テメエがな」

蔵馬?

「……よからうつ……もともと貴様は消すつもりだった……予定が多少早まつただけの」と

「アアアアアアアア……

妖氣を解放し始める一人

シャツ！

先に動いたのは幽助

幽助
「シユツ」

幽助の鉄拳が飛ぶ

蔵馬?
「ククツ」

それを滑らかにかわす蔵馬?
..

幽助
「ウラウラウラあ！」

幽助の乱打の嵐

蔵馬?

「...フツ」

踊るようなステップで全てをかわす蔵馬?

蔵馬?
「遅い」

幽助
「ツ！」

蔵馬？は一瞬にして幽助の懷に入つた

蔵馬？

「ハアツ！」

ドスツ

雑草のナイフが胸に突き刺さり、その色は紅に染まっていく…

5・蔵馬？（後書き）

先が見えません…誰か教えて！

6・敗北

胸には深くナイフが刺さっている

幽助
「いつ……て」

蔵馬？

「『核』を外したか」

『核』とは魔族の心臓である

幽助
「クソ」

蔵馬？

「次で決めてやる」

蔵馬？はおもむろにえりあしに手をやつた

蔵馬？

「知ってるか？綺麗な薔薇には……とげ棘とげがある」

えりあしから取りだした薔薇に妖氣を放つ

幽助
「ツ！」

未だ幽助の胸には雑草のナイフが刺さつたままだ

藏馬？

「ローズ・ウイップ！」

妖氣を受けた薔薇は鉄をも引き裂く鞭へと変化した

藏馬？

「終わりだ… 風華円舞陣！…」

凄まじい風と花を舞い散らせ、 薔薇の鞭は生き物のように舞つ

ズガガガガガガツ

幽助

「ぐあああああツ！」

至近距離での風華円舞陣は幽助の皮を… 肉を剥ぎ取る

ギュチャアツ

ズビィイツ

…ブシユツ

薔薇の棘が肉に刺さり、 皮を引き裂き… 血が噴き出す

幽助

「ガアアアツ！」

おびただしい量の返り血に藏馬？の顔が紅く染まつていく

藏馬？

「ククク…死ね死ね死ねえ～！」

幽助の意識が消えていく…

・・・・・

？？？

「剣よ…伸びるーーツーー！」

・・・？

藏馬？

「グアアアツー！貴様あ…よくも…」

風華円舞陣が止まつた

幽助

「…くわ…ばら」

その場に崩れ落ちる幽助

藏馬？

「貴様ー名を名乗れえーー！」

桑原

「へつ…よおく聞きやがれー世紀の美男子・桑原和真サマたあ俺の
事よー！」

藏馬？

「…どいつもこいつも邪魔しやがつてー死ねあツーー！」

藏馬？が桑原めがけ飛び出す

桑原

「！」こやあ……セ蔵馬……」

桑原と蔵馬？の攻防が始まった

ぼたん

「幽助！」

幽助

「ぼたん……」

ぼたん

「大丈夫かい？今治療するよ」

幽助

「わり……油断しちまつた……」

ぼたん

「後は桑原君に任せな……幸い桑原君の不意打ちが効いてるみたいだ……動きが鈍いよ……セ蔵馬」

幽助

「……ああ、それでも桑原にや荷が重い相手だ……」

ぼたん

「そうだね……アンタを回復したらわざと逃げるよ……」

ぼたんは全靈力を込めて治療を始めた

6・敗北（後書き）

幽助は弱くない。

相手のスピードが速いだけです。
決して幽助は弱くない（笑）

7・反撃

実際ぼたんの治療は優れていた。しかし、それ以上に幽助の回復速度は異常だった。

幽助

「サンキュー。ぼたん」

ぼたん

「まつたく…アンタはバケモンかい」
フフ…と微笑むぼたん

幽助

「これでも一応魔族だからな」

「…と笑いかえす幽助

ズギヤツ

桑原

「ぐあつち」

桑原が吹つ飛ばされてくる

幽助

「桑原！」

ぼたん

「桑原君！」

桑原

「よ…よお浦飯。もつお田覚めか?」

幽助

「ああ、『ぐるーだつたな。バトンタッチだ桑原』

ぼたん

「ちょ、ちょと幽助!? 逃げるんじゃ…」

幽助

「つむせーな。俺には『にげる』なんて『マジドはねーんだよ』

桑原

「ちよつと待て。アイツは俺の獲物だぞ浦飯」

幽助

「そーか桑原クン代わってくれるのかー」

桑原

「ヒトの話を聞ゲヒヤツ…」

幽助のアッパーが桑原に炸裂。桑原が宙に舞つ

ぼたん

「災難だねえ」

グシャツ

桑原が地に落ちる

藏馬？

「…もひこいか？」

幽助

「ああ。待たせたな… 第2「ラウンジだ」

藏馬？

「今度こそ殺してやるよ…」

幽助

「次は油断しねえ。オメーも本気でこねーと…

藏馬？

「本気でいかないと…なんだ？」

幽助

「瞬殺しちまうぜ」

チツ

藏馬？

「上等だコラー！全力で潰してやるよー。」

幽助

「くつ…藏馬のフリは辞めたのか？しゃべり方が素になつてゐるぜ」

藏馬？

「黙れえーもはや藏馬などじょでもいいわッー」

先程とは「つて代わり、幽助は冷静さを取り戻していた

幽助

「きやがれ」

蔵馬？

「死いねえええツ！！」

蔵馬？が超高速で襲いかかる

幽助

「確かにオメーのスピードはたいしたもんだ…でもなあ…」

幽助の右手に力が集まる

蔵馬？

「シャアツ！」

…ビュアツ

幽助は蔵馬？のスピードを見切り、その拳をかわした

蔵馬？

「…な…」

ガシツ

幽助の左手が蔵馬？の首をつかむ

幽助

「く、り、いやがれ…」

蔵馬？

「…あああああああッ！」

首を抑えられいるため身動きが出来ない

幽助

「ツ靈・丸ーー！」

ズゴゴゴゴシ…ボオーンーー

蔵馬？

「ギーいやあああああああッーーーー！」

特大靈丸により蔵馬？の身体が弾け飛ぶ

蔵馬？

「…な…ぜ…、俺のスピードを…見切れin…」

アタマだけの蔵馬？が悔しそうにつぶやく

幽助

「へつー俺の仲間にやテメエのーー〇〇倍は速えヤツがーーるぜ

7・反撃（後書き）

だんだん長くなつていぐー（^ー^；）
ね？ 幽助は強い？（笑）

幽助
「…で？ オメー本当に誰なんだ？」

偽藏馬
「…藏馬」

「ゴン

偽藏馬

「あがッ…」

幽助達はアタマだけの偽藏馬に尋問を行っていた

幽助
「わざと白状すりやあ逃がしてやる」

偽藏馬

「…………わかった…俺の名前は翔王。^{しゅうおう}田舎のスーパーでうつとまぬの通つた妖怪だ」

幽助

「しょひの？ 知らねえな。その妖怪がなんで藏馬のカツコしてんだ？」

翔王

「…頼まれたんだよ」

幽助

「頼まれただ？誰に？」

翔王

「……」

ゴン

翔王

「おふあー。」

幽助

「早くお戻こ」

翔王

「あんた口クな死にかたしねえよ。…魔界では見たことのねえ妖怪
だつた…なんて言ったか…一本ウンチ…みたいな名前だつたな」

ゴン

翔王

「あやばー。」

幽助

「マジメに答へる」

翔王

「嘘じやねーよークソみたいな名前だつたんだつてー。」

ぼたん

「そんな汚い名前の妖怪いたかねえ……」

幽助

「……つーむ」

桑原

「……戸愚呂じやねえのか?」

桑原がいつの間にか復活して言つた

翔王

「そおだ!トグロ!戸愚呂つていづちつちえー妖怪だつた!なんで
も藏馬つて妖狐に恨みがあるとかで…」

幽助

「戸愚呂兄か…」

桑原

「確か戸愚呂兄は藏馬にやられて入魔洞窟で永久束縛だろ?」

ぼたん

「誰かが戸愚呂を解放したのかもしれないね…」

翔王

「おい」

幽助

「なんだ」

翔王

「もお行つていののか?」

ぼたん

「ちよいとお待ちよ。アンタはどおやつて蔵馬の体と能力を手に入れたんだい？」

翔王

「見た」との無い妖怪に蔵馬の姿と能力を貰つた。戸懸町の復讐に協力してこようつだつたな……」

桑原

「結局戸懸町はなにがしたいんだ？」

翔王

「蔵馬の姿をした妖怪が無差別に人間を襲えば、本物の蔵馬は靈界のブラックリストに載り、家族とも一緒に暮らせなくなるだらつへ」

幽助

「やる事が汚ねえな」

桑原

「確かに戸懸町の力じや蔵馬にや傷ひとつ付けられねえもんな」

ぼたん

「確実な手だね」

幽助

「それで本物の蔵馬はどうにやつたんだ？」

翔王

「それは魔界の……」

ボンッ

瞬間。翔王が弾け飛んだ

幽助
「！？」

桑原

「…スゲエ妖氣だ」

ぼたん

「あそこー。」

ぼたんが指差す方向には長身の男が立っていた。

8・真相（後書き）

やつと人間界編（？）も佳境…飛影が出てこない（笑）

9・魔界へ

「シ...シ...

スラリとした長身の男がゆっくりと歩いてくる。全身黒づくめでマントをはおつている

幽助

「誰だテメエ」

「コツ

男が幽助達の前に立ち止まる

ぼたん

「幽助...気をつけるんだよ?なんだか異様な雰囲気を感じるよ」

幽助

「ああ、わかつてゐる」

桑原

「妙な妖氣だ」

構える幽助と桑原

男

「...浦飯幽助と桑原和真だな...」

男は低い声でつぶやく

幽助

「だつたら?」

桑原

「やんのか」「」

ぼたん

「アンタ何者だい?」

男

「うがち
…穿」

ぼたん

「穿…どこかで聞いたよ'つな…」

幽助

「テメエ戸愚田の仲間か?」

穿

「…正確には仲間ではない。我らは互いに利用しあつて いるだけだ」

桑原

「手を組んでるつて事か」

穿

「ああ」

ぼたん

「戸愚田のへだらない復讐に手を貸してアンタに何の得があるの?」

穿

「私は戸愚呂の復讐になど全く興味はない。私の目的は浦飯幽助・桑原和真・藏馬・飛影の戦闘データの採取」

幽助

「俺達の...データ...」

穿

「左様。すでに魔界の有力妖怪のデータは数百年かけて収集済みだ」

ぼたん

「データを集めてどうする気だい?」

穿

「データを元に強化サンプルを精製...改良し最強の人工妖怪軍隊を造り上げ、私が魔界を...靈界を人間界を統一するのだよ...」

桑原

「ちきしおう...またコレ系かよ...」

幽助

「左京並のクレイジー野郎だな」

穿

「ククク...なんとでも詮づが良い」

幽助

「コイツを『』でやつちまえば全部解決すんじゃねえか?」

穿

「フハハ...やれるものならやつてみたまえ...ただし、藏馬君を永久

に失つ事になるがな」

幽助
「んだと?」

桑原
「藏馬はどこだ!?」

穿

「それを教えたまらないだろ?...魔界へきたまえ...『処刑人
の洞窟』で待つていてよ...」

ボンツ

穿の煙幕があたりを満たす

ぼたん

「ゲホ...ゲホツ」

幽助

「ちきしじょう!逃がすか...ゲホツ」

桑原

「見えねえ!」

煙が晴れていく...

ぼたん

「...逃げられたね」

桑原

「どうすんだ？ 浦飯」

幽助

「決まつてんだろ。行くぜ……魔界に」

9・魔界へ（後書き）

新しいキャラ出しちゃったよーめんどくやこいとこにならせてた～（笑）

穿に逃げられた翌日。幽助、桑原、ぼたんはコーンマへの報生を済ませ、界境トンネルを開いていた。

特防隊隊長

「間もなくトンネルが開きます」

ぼたん

「わざわざすまないね」

コーンマにより界境トンネルの結界が取り払われたとはいえ、界境トンネルを開くには専門の技術が必要であった

隊長

「いえ…コーンマ様の命令ですので」

桑原

「戻る愚囂のヤロー、今度はアドメをしてやんぜ!」

幽助

「穿つてヤローもオシオキが必要だべ」

やや興奮氣味の2人がトンネル開通を心待ちにしている

ぼたん

「あらひ…やる気マンマンだね」

隊長

「…開きますよ」

幽助・桑原

「…」

空間に亀裂が入り、徐々に開いていき、丸いトンネルが完成していく…

幽助
「つっし。行くぜ」

桑原

「おひー。」

PHンマ

「ひむー。」

・・・・・

幽助

「オメヒも行くのかよー。?」

PHンマ

「ひむー。」

桑原

「つむー。じやねえよー。」

隊長

「PHンマ様ー。」

「ハンマ

「ワシだって藏馬を案じておるのだ…邪魔はせぬ。」

皆

「いや邪魔」

「ハンマ

「がーん」

・・・・・

ぼたん

「気をとつなおして…行くかい」

桑原

「ああ」

幽助

「首洗つて待つてろよ…」愚団

3人は界境トンネルへ侵入していった…

「ハンマ

「…」

隊長

「良かつたのですか？今ならまだ追いつけますが…」

「ハンマ

「イヤ…いいのだ。 実際ワシは役にたたん。 魔封環なき今…ワシは

足手まとい以外の何者でもないしな」

隊長

「…あなたは靈界、人間界、魔界すべてを幸せにしようと日々チカラを使っておられるでしょう」

ゴンマ

「その程度の事…アイツらの危険に比べれば屁でもないわ」

隊長

「ふ…やはりアナタは素晴らしい指導者ですよ…」

界境トンネルが閉じられた…

1-0・PHASE TRANSITION (後書き)

ちょっとつまらない話でした（笑）

魔界

幽助が偽藏馬（翔王）と闘つている頃…飛影は魔界に到着していた。

飛影

「…」

？？？

「おお！飛影！久しいのつ！」

現魔界統一者・煙鬼である。飛影はまず煙鬼を訪ねていたのだ。

飛影

「靈界・人間界での『食事』事件について何か知ってるか？」

煙鬼

「なんじやすいぶんいきなりじやの一」

ガハハ…と煙鬼

飛影

「緊急事態なんだ」

煙鬼

「まあそつ急くな。これはあくまで噂だがな…ビリヤウ『上グロ』
という妖怪が絡んでいるらしい…」

飛影

「…『愚囮』だよ。」

煙鬼

「なんじや…知り合いか?」

飛影

「…いや」

煙鬼

「変なヤツじやのー!ガハハ!」

飛影

「…それで? その『愚囮』の居場所は?」

煙鬼

「ハツキリした事はわからんが…どうやら処刑人の洞窟へ断首台の丘付近を根城にしておるようだの!」

飛影

「わつか…」

ぐるつと煙鬼に背を向け、邪魔したな…と言ご去る飛影

煙鬼

「…変わった男じや」

魔界・断首台の丘

飛影

「全く妖氣を感じん… チツ！ハズレか…」

？？？

「そうでもないみたいよん」

飛影

「！」

いつの間にか飛影の脇には女が立っていた

飛影

「貴様… いつのまに…」

女

「あら 気付かなかつた？」

飛影

「…俺になにか用か？」

女

「冷たいわね」 噂どおりのクールガイね

「

飛影

「用がないなら俺は行くぞ」

女

「ふふ」

瞬間、女は飛影に襲いかかってきた

飛影

「ツー！」

飛影は超速で回避。しかし女は空中でもうワンステップ踏み、飛影めがけて突進してきた

女

「逃がさないわよん」

女の拳が飛影の腹にめり込み…メキメキと音を立てる

飛影

「…ぐ…」

スマアツ！

飛影はすかさず刀を抜くが女はすでに飛影の間合いの外へ逃げている

飛影

「チツ…逃げ足だけは立派だな」

女

「あら 許め言葉？ そり…アタシのこの脚はアナタ以上のスピードを生むわ」

タンタンと足踏みをしながら自分の脚を痙攣している

飛影

「…俺以上だと？ククク…のぼせあがるなよ」

女

「あら…じゃあ試してみる?」

飛影

「…上等だ」

ヒパツ!

風を切る音と共に両者の姿が消える。時折あちらうこちらでチカチカと火花が散っているが、2人の姿は見えない

バチツ
ガギイツ
ギインツ

女
「シャア」

飛影

「…ぐあ…」

再び両者の姿が見えた時、飛影は地面に膝をついていた

11・魔界（後書き）

やつと飛影（笑）

12・速度の勝者

女 「がつかりだわ その程度だつたなんて」

飛影

「…あまり俺をなめるなよ?」

ビッ

女

「…へえ…」

女の頬に血が滲む

飛影

「貴様の脚はなんだ? 血の流れを感じん」

女

「あら わかる?」の脚はアタシのお氣に入りのハカセに貰つた義足よん」

飛影

「…フン」

つまらんなそつに鼻をならす飛影

女

「そおだ 自己紹介がまだだつたわね

アタシは跳ちよう よろしくね

ん
」

飛影

「貴様の名なじいーでもここ」

跳

「冷たいわねん
」

飛影

「...」愚図を知つてゐるな

跳

「...フフ セテ...ビツカシラん?」

飛影

「...白状しないと斬るぞ」

跳

「どおぞお好きなよつこ... できるものなら

」

飛影

「フツ」

タンツ

飛影が身軽なステップで跳に近づく

「 跳
」

瞬間、飛影が斬りかかる

ブオッ

しかし刀は空を斬る

跳

「遅いわねん」

飛影の背後に回った跳の拳が放たれる

シャツ

跳の拳は飛影の残像を捕えた

飛影

「貴様がな」

跳

「！？」

飛影

「邪王炎殺剣！」

紅蓮の剣が跳の背中を引き裂く

ズシャツ

跳

「…ツ…！…やるわねん」

かわうじて致命傷を避け、すかさず闇合戦をとる跳

飛影

「ア、懸命せうじだ？ 言わると逆戻り」

跳

「…ふふ」

「オオシ

その時、跳の周囲に妖氣の風が巻き始めた

跳

「やれやれ本氣でこつてもいいかしら？」

飛影

「なに？」

ヒヤン

飛影が風を切る音を認識した瞬間…

…「アハシ

飛影

「…」

口いっぱいに鉄の味がひろがる

跳

「Bye - Bye」

跳の腕は飛影の体を貫いていた

飛影

「.....クソ」

飛影の意識が遠のく

ドサッ

12・速度の勝者（後書き）

なんか変な感じになつてきた――（――”――：――）

13・紅蓮の貴公子

…深い闇の中…

飛影は歩いている

先には光

後ろには温もり

飛影の周りだけが漆黒に包まれている

跳

「弱いオトコねん」

…黙れ

蔵馬

「だから誰も助けることができない」

…違う

…俺は…お前を助けよ!とした…

雪菜

「弱いから…自分が兄だと言えないのですね」

…雪菜…

蔵馬

「弱いから」

跳

「弱いから」

雪菜

「弱いから」

…やめてくれ…俺は強くなつた…心も…体も…昔より遙かに…

…強く…なつたはずだ…

雪菜

「強く～強さとみなに～」

…何？

雪菜

「強靭な肉体？豊富な戦闘経験？産まれついてのバトルセンス？」

跳

「アナタはアタシに負けたじやない」

藏馬

「このまま無様に死んでゆくのだから…」

…違う…昔の俺ならば迷わず戦闘の強さと答えた…藏馬も見捨ていた…

だが俺は知ったんだ！アイツに出会い…俺は変わった…真の強さを知つた！

雪菜

「 真の強さ? 」

…信じる心

アイツが…幽助が教えてくれた…自分の信じたもの…友人、家族、愛する人…そのためなら、俺たちはどこまでも強くなれる…

信じているから

守りたいから

大切だから…

それが俺の…『つむれ』だ…!

蔵馬

「…それでいい。お前の闇は『迷い』。先の光は『信じる心』。後ろの温もりは…『愛』」

…蔵馬…

飛影の周りから闇 迷い が晴れていぐ…

…ああ。俺が信じるは『仲間』そして『俺自身』！必ず『愚鈍のクビ』を取つてやるぜ！

フフ…蔵馬は笑いながら消えていった

飛影

「…おー」

跳

「…」

去りうとある跳を呼び止める

跳

「なかなかしぶといわねん でも辞めといた方がいいわ…アナタ、もひ虫の息でしょう」

飛影

「…クク…言つただろう。俺を…なめるなあ…」

ドンッ

飛影の妖気が邪炎へと変化し、うねりを上げて燃え上がる

跳

「む…胸を貫かれたのよ…致命傷でしょ…あの出血で…どうしてこんな炎を出せるのよ…?」

飛影

「俺の信じるものため…俺自身のために…貴様には済んでしかり」

飛影の邪眼が妖しく光る

跳

「……！」……」ないで……」

飛影の炎は巨大な津波の如く火力を増していく

跳

「ば、バケモノ！」

明らかに計算外という顔の跳

飛影

「おおおおおッッ……！」

シャツ

飛影は黒龍を自らの体へ取り込む。すると飛影の妖気が何倍にも膨れ上がった

跳

「ああああ……た、助けて……と、戸愚呂の事を教えるわッ！だから……」

飛影

「……邪王炎殺……」

大気が震え、熱風が巻き起る

跳

「戸愚呂は処刑人の洞窟にいるわ！だから助けて……必死に命ごいをする跳

飛影

「……黒・龍・波あ！」

飛影の右手より暗黒の火炎龍が飛び出し、雄叫びを上げながら跳め
がけ襲いかかる

跳

! ! ! ! !

跳

二二二

黒龍は跳の真横を通り過ぎていった

「...処刑人の洞窟だな」

跳

「わざと外した？」

飛影

飛影が去りつとすると

「待つて！」

「...なんだ」

跳

「…処刑人の洞窟には戸愚呂の他にも妖怪が待ってるわ…」

飛影

「…」

跳

「最も気をつけるべきはアタシに義足を付けた裏魔界医『穿』^{うがち}…ヤツの『メス』には気をつけなさい。一度でも切られたら終わりと思
いなさいクール・ガイ」

飛影

「…フ」

飛影は処刑人の洞窟へと向かつた

13・紅蓮の貴公子（後書き）

黒龍波とかめはめ波撃ちてーー！

跳 「アタシもヤキがまわったものねん」

飛影が去り、一人残された跳

跳

「あーあ、勝ったと思ったのにな…あんないい顔で立ち上がるんだ
もの」

フフ…と跳

???

「まつたぐ…テメーにやガツカリだ」

跳
「…
蛮鬼^{ばんき}!?

蛮鬼

「あんなヒヨロイ野郎に負けるたあな…」

跳

「うるさいわねん…からかいに来たの?」

蛮鬼

「あ?俺様がんな事でわざわざ来るわきやねーだろ」

跳

「……じゃあ何の用よ？」

蛮鬼

「決まつてんだろ……裏切り者には死を一世の中の鉄則よ

跳

「……そう。いいわん 相手になつてあげる」

フラフ…と跳が立ち上がる

蛮鬼

「飛翔舞姫・跳…窓の命により死んでもらおう…」

跳

「…なるほどねん アタシは飛影のデータを得るための捨て駒ってワケ?」

蛮鬼

「ああ。テメーも余計な情報を飛影に与えなけりや 死なずにすむのになあ」

跳

「わうね…ふふ」

蛮鬼

「ここ」で消しとかねえと飛影の味方になりかねん。弱つていのつちに絶つ…」

跳

「…そりかも…ね」

蛮鬼

「死ねあー！」

蛮鬼が大きくふりかぶる

ブォン

空を切る拳

跳

「アナタのスピードじゃアタシは捉えれないわん」

蛮鬼の背後からつづぶやく

蛮鬼

「グフフ…これならどうかな…？」

蛮鬼が印を結ぶ

バツバツバツ

跳

「ツー・チイツー！」

何が起こるか悟った跳が拳を繰り出す

跳

ガシイツ

「ツ」

蛮鬼は片手で印を結びつつ跳の拳をつかむ

跳

「…しまつたツ…！」

蛮鬼

「鬼道…」

蛮鬼の腕が巨大化する

メキヤツ

あまりの握力に跳の拳がイビツな音を立て潰れる

跳

「ツギヤあああああツ…！」

蛮鬼

「…金剛拳…！」

跳

「…！」

ボギヤツ

跳の頭が肉片となる

蛮鬼

「任務完了！… グフフ…。飛影の戦闘データも手にはいった… これで穿に新たな能力を貰うか」

幽助が穿に逃げられた直後の事であった。

14・新たな妖怪（後書き）

野蛮な鬼と書いて蛮鬼！（笑）

15・飛影拉致

飛影

「……」こんな時に…『冬眠』か!」

邪王炎殺拳最強奥技・炎殺黒龍波にはたつたひとつ弱点がある。それは黒龍波使用後、使用者もろとも数時間『冬眠』してしまう事である

飛影

「く……」

その場に倒れこみ、『冬眠』に入る飛影

1時間後

蛮鬼

「なんだあ?こんなトコで寝やがって。ヤル気あんのかコラ」

跳を抹殺し、洞窟へ帰る途中の蛮鬼に発見された

蛮鬼

「……度いい。コイシもここで消しとへか

蛮鬼が印を結び始める

？？？

「お待ちなさい」

蛮鬼

「あん？… むお、 穿！帰ったのか」

穿

「はい。 たつた今。 それより飛影を洞窟までかつぎなさい」

蛮鬼

「お、 おう」

穿

「ククク…」

蛮鬼は飛影をヒョイとかつき、 穿と共に処刑人の洞窟へと帰つていつた…

時間は次の日に移る

煙鬼

「飛影なら昨日來たぞい」

幽助

「ホントか！？ オッサン！」

煙鬼

「ああ。 トグロの情報を教えてやつたわい」

桑原

「それで…? 飛影のヤローはどうに行つたんだよ?」

煙鬼

「おそらくは断首台の丘か処刑人の洞窟だらうな」

幽助

「んなコト言われてもどこだかわからんねーよ」

ぼたん

「どっちの方向だい?」

煙鬼

「こりからまーつすぐ北じや。やうじでかい石柱があるので。それが断首台の丘だ」

ぼたん

「北へまつすぐだね」

幽助

「つっしー急げ」

桑原

「飛影のヤローにいとこ持つてかれんのはシャクだしな」

煙鬼

「がははー! 頑張れ若僧共」

幽助一行は魔界に到着後、まずは魔界で調査している(ハズ)の飛

影と合流しようと、煙鬼を訪れていた

桑原

「しつかし飛影がマジメに調査してたなんてスッゲー意外だな」

幽助

「アイツはああ見えて根は仲間思いのいいヤツなんだよ」

走りながら幽助は微笑む

桑原

「仲間思いだ？あの冷徹逆毛チビが？」

ぼたん

「桑原君…飛影がいないのをいー口トに」

桑原

「鬼の居ぬ間に…てヤツよ」

ケラケラと笑う桑原

ぼたん

「…まあ本人の前で言つたら丸「コゲだもんね」

幽助

「…お。アレじやねえか？」

幽助たちの前方に崩壊した岩柱が姿を現わした

桑原

「…浦飯。□□つて…」

幽助

「…俺達が仙水と鬭つた場所だな」

桑原

「…なつかしーな」

ぼたん

「なつかしんてる場合ぢやないよー。さつやれと懸命のアジトを探すよ」

幽助

「アイアイサー」

桑原

「…？」

その時、桑原がナニかを発見した

桑原

「浦飯！」

辺りは血の海だった…

幽助
「…ひでえな」

辺りには大量の血と肉が飛び散っている

桑原
「飛影の仕業か?」

幽助
「飛影でも『』まで粉じなにや できねえよ。それに『斬った』… つ
ていうより『潰した』って感じだ」

ぼたん

「これ以上ここにいても無意味だね。処刑人の洞窟つてのを探すよ

幽助
「…ああ」

幽助たちはかつて跳だつたモノをあとにした

それから1時間もたつた時

ぼたん

「…おや?」

幽助

「どうした? ぼたん」

ぼたん

「ちよいと幽助。」
「それ見てみなよ」

断首台の辻からやや離れた場所に、それは落ちていた

幽助

「！……これは

桑原

「飛影の氷涙石！」

氷涙石とは、氷女という妖怪の涙から出来る圭石であり、飛影と雪菜の母の形見でもあった。

ぼたん

「……これはマズイ方向に向かってるかもしねないね……」

幽助

「……飛影……」

氷涙石を握りしめる幽助

桑原

「……なあ。これ足跡じやねえか？」

ぼたん

「え？」

どれどれ……ぼたんは桑原の指差す所を見る。それは確かに足跡のよ

うに見える

ぼたん

「飛影のではないようだね……」

幽助

「煙鬼のオッサン並にテケヒヤツじゅねーと」んなくつさり足跡は
残んねーだろ」

桑原

「行つてみよ」

ぼたん

「…そうだね。他に手掛けがあるわけでもないし…」

幽助

「ああ」

幽助たちが畜鬼の足跡を追いはじめた頃…

処刑人の洞窟

???

「ヒヤハハ！まつたく、笑いが止まらねえなあー！」

背の低い妖怪が高笑いしている

穿

「おや？貴方の計画は失敗したのではなかつたのですか？」

蛮鬼

「ああ。わざわざ蔵馬の姿と能力を『えてやつたのに翔王の力スが
ドジリやがつたお陰でな」

？？？

「もはや計画なんかどつでもいいんだよ！…より蔵馬を苦しめる方法
を思ついたんでなあ！」

穿

「…ほう。して、その方法とは？」

？？？

「蔵馬にとつて最も大切なのはなんだ？母親だ！…だが母親はすでに
靈界によつて守られてやがる…」

穿

「わつですね」

？？？

「蔵馬にとつて母親と同じ位大切なのが『仲間』だ！…俺にとつては
ムシズの走る言葉だがなあ！」

蛮鬼

「ナカマ…グハハ」

？？？

「ヤツの田の前で命よりも大事な『仲間』を一匹ずつぶつ殺してい

くのよーひひひ…仲間を殺された絶望のなかでヤツは死んでくれ
よー」

穿

「…ではどうあえず浦飯幽助、桑原和真を捕えればよいのですね？」

戸愚呂

「ああ、頼むぜ？裏魔界医サンよ」

穿

「…楽しみですねえ」

16・追跡・復讐（後書き）

ウソコマンがやっと登場！

…ひどく蒸し暑い

…それにこの「オイ

…まるで密林にいるような「オイ」と湿度

飛影

「…う…」

藏馬

「お田覚めかい？」

『冬眠』から覚醒した飛影の耳に、心地のよい声が聞こえる

飛影

「藏馬…？…ツ…！」

そこには探し求めていた妖狐・藏馬がいた

藏馬

「…すまない飛影、巻き込んでしまつて…」

飛影、藏馬は巨大な植物に体の半分を埋め込まれ、身動きがとれなくなっていた

飛影

「…ちつ。なんだこの植物は…」

藏馬

「捕縛樹の改良種のようだ。触るだけで妖氣を吸いとられるみたいだな…」

飛影

「どうりでうまく炎が出せないワケだぜ」

チツ…不機嫌に舌打ちをする飛影

藏馬

「どうにかして脱出しなければ…幽助たちが危険だ」

飛影

「…幽助が魔界にきているのか?」

穿

「ええ」

飛影

「!?」

飛影

「…貴様…何者だ…」

2人が捕えられている部屋の隅には、いつの間にか穿が居た

穿

「はじめまして飛影クン…私は穿。以後お見知り置きを…」

飛影

「… 無だと？」

跳が忠告していた裏魔界医・穿がそこへいた

穿

「ククク… 蔵馬クン。 じつやうまたお仲間がここに向かっているよ
うですねえ」

藏馬

「… くッ」

穿

「… ククク。 ワクワクしますねえ… もうすぐ私の夢が現実となるの
ですか…」

飛影

「マッジ・ドクターめ」

穿

「なんとでも言いなさい。 さて… 私は浦飯幽助、 桑原和真を捕えて
来ましょつか」

藏馬

「貴様あ！」

必死にもがくが捕縛樹からは抜け出せない

穿

「貴方には『愚図から』プレゼントがあるよつですよ~。」

藏馬

「何？」

穿

「ククク…楽しみに待つていて下れこよ」
不適に微笑み、穿は部屋を去る

藏馬

「…くわ。 旦懸田…」

飛影

「…ふん。 ヤツの考える事などたかがしれてる。 そんなことよりも
お前は脱出方法を考えろ」

飛影はまだ炎を出さうとせばっしている

藏馬

「…ああ。 そうだな」

藏馬は瞳を閉じ、思案を始めた…

「ひやー

桑原

「しかし長えな」

ぼたん

「ほんと……どこまで続くのかねえ」

断首台の丘から畜鬼の足跡を追つて数時間。さすがに疲労の色がでてきた

幽助

「大丈夫か? ぼたん」

ぼたん

「ん。平氣」

とマサイン

桑原

「といひで浦飯」

幽助

「どーした? クソならあつちの北陰で…」

桑原

「アホか! …この足跡が戸懸山のアジトに続いてたとしてよ…どりやつて蔵馬と飛影を助けだすつもりだよ」

幽助

「ああ？ 戸愚呂のヤローをぶつ飛ばせば万事解決だろーが」

桑原

「…」

ぼたん

「呆れたアホだねえ」

やれやれ…と呆れ顔の2人

幽助

「なんでだよ」

桑原

「相手はあの戸愚呂兄だぞ？」

ぼたん

「あいつが蔵馬と飛影を人質にしてるんだよ？ 戸愚呂が人質を利用せず素直にやられるヤツかい？」

幽助

「けけけ…安心しなさい…そこら辺の対策は考えてるぜ」

桑原

「なんだよ」

幽助

「ふつふつふ…」

ぼたん

？」

幽助

一次元アーティスト

桑原

無理

「早！」
ぼたん

沈默：

幽助

「いいか桑原くん。今回のミッションは全て君の腕にかかるているのだよ」

ほんと肩に手をのせ桑原をひとす

桑原

かかなか思ひ通り出でんがよ

「便秘の主婦じゃあるめえし……やる気でカバーだよ桑原クン！」

桑原

「無理だつて言つてんだろ」「うう

ぼたん

「うーん、雪菜ちゃんは哀しみだねえ……」

ぼたんがボソッと呟く

ピクッ

ぼたん

「せつかく桑原君の活躍を雪菜ちゃんに話せると思ったのにねえ」

ぼたんナイス！ 幽助は心底ぼたんに感謝した

桑原

「ふ…フハハハ！ この桑原-samaに任せなさい…見ていて下さい雪菜さん！ この俺の雄志を！」

幽助

「…」

ぼたん

「単純だねえ」

桑原

「つうあー！」

瞬間、桑原の手に次元刀が現れた

桑原

「こ」の足跡に残った妖氣めざして次元を斬る…「行くぜヤローー！」

桑原が次元刀を振ると、目の前の空間が裂け、次元の穴が姿をあらわした

幽助

「首洗つてまつてやがれ！戸愚呂」

ぼたん

「まつたく…桑原君は扱いやすいねえ」

3人が入ると、次元の穴は静かに閉じていった…

疲れたー

処刑人の洞窟

蔵馬は考えていた

妖氣を吸われ、身動きひとつ取れないこの状況を、どう打開するか…

飛影

「ビハヤリ密のよへだ」

飛影は部屋の外にかすかな氣配を感じとっていた

そのとおり、部屋のドビラが静かに開いた…

戸懸田

「氣分はビうだい？ 蔵馬あ」

そこには諸悪の根源、戸懸田がいた

隣に畜鬼を引き連れて

蔵馬はただ戸を閉じている

戸懸田

「ククク… つれないなあ。 楽しく話そひせ」

蔵馬の戸が開いていく

蔵馬

「… 痴が言つていたお前のプレゼントとはなんだ」

冷めた眼で戸懸町を見下ろし、問う

戸懸町

「ひひ…怖え怖え…。なんだ、知つていたのか。藏馬あ…ナメヒにやあ『仲間の死』という最高のプレゼントを用意してやるぜ」

蛮鬼

「…ぐふふ」

飛影

「ふん。考えが単純だ」

藏馬

「俺を今のうちに殺せよ戸懸町。やつしないと…俺は必ず貴様を殺すぜ?」

身動きができず、妖氣も吸われているにもかかわらず。藏馬の空氣は異常であった

戸懸町

「…く…そんな格好でなにができるんだよ」

その氷のような冷たい眼差しは、戸懸町に『恐怖』を叩き込むには十分であった

蛮鬼

「ぐはは。強がってやがる」

鈍感なのか、蛮鬼は蔵馬の雰囲気に気付いていない様子で笑っている

飛影

「…クク」

蛮鬼に続き、飛影も笑いだす

戸愚呂

「なんだテメ…」身動きもとれねえ！妖氣もすっからかんのクセに…」

蔵馬と飛影は戸愚呂の後方にある氣配を感じていた

蔵馬

「お前の負けだ。戸愚呂」

戸愚呂

「なに言つて…」

そのとち、戸愚呂の後の空間が裂けた

蛮鬼

「！」

戸愚呂

「……な…」

戸愚呂と蛮鬼は状況を飲み込めてない

幽助

「ウルア！」

次元刀により蛮鬼の妖氣を追つてきた幽助たちが、目の前の戸懸呂めがけ飛び出す

戸懸呂

「ぐゲツ！」

幽助の鉄拳が振り向き様の戸懸呂を吹き飛ばす

蛮鬼

「なんだテメエら！」

状況を飲み込んだ蛮鬼が叫ぶ

桑原

「愛の戦士！桑原和真様とその一行よーー！」

桑原が次元刀を振りかざし、その切つ先を蛮鬼に向ける

話進んできたー(・。・)(ノ)

藏馬の足下には、懸垂が伸びている

蛮鬼

「愛の戦士だ？ふぞけやがつて」

ぼたん

「桑原君は大マジなんだけどね」

そもそも柱の陰に避難したぼたんが呟く

幽助

「仲間を返してもいいぜーーー！」

蛮鬼

「…ぐふふ…せつか、テメへら藏馬の仲間か」

桑原

「モーゆー」つた

蛮鬼

「俺サマは藏馬をビリコヒト興味はねえ」

幽助

「あ？」

蛮鬼

「いいぜ？連れてつても。藏馬と飛影のデータは取り終わつたから

な

桑原

「……なんか拍子抜けだなオイ」

幽助たちはテキパキと2人を解放した

藏馬

「……ぐ。 すまない皆……」

ぼたん

「なーに言つてんだい。 アンタはなにも悪くないだろ?」

幽助

「ああ、全部戸愚呂の仕業だしな」

藏馬

「……すまない」

飛影

「フン。 だいたいあの時、入魔洞窟で戸愚呂を殺しておけばこんな事にはならなかつたんだ」

桑原

「捕まつたくせに」

飛影

「……」

ぼたん

「とにかく！ わざと逃げるよ。2人を休ませなきや」

藏馬も飛影も、見た目よりだいぶ疲弊していた

桑原

「ああ、… 次元刀！」

次元を裂く桑原

蛮鬼

「ちょっと待て」

今まで黙つて見ていた蛮鬼が口を開く

蛮鬼

「俺は藏馬と飛影は返してもいいって言つたんだぜ？」

つまり…

幽助

「俺たちは残れつて事か…」

蛮鬼

「（うなづき）」

桑原

「テメーの言う事なんざ聞いてられつか！」

藏馬と飛影、ぼたんを次元の裂目に放りこみ、自分も穴に入らうと

する桑原

桑原

「行くぞ浦飯！」

そのとく

蛮鬼

一 もせるかあ！」

蜜鬼が飛び出す

「ちつ！先に行け桑原あ！！」

蛮鬼の突進を体で受け止め、幽助が叫ぶ

桑原

・ 細文は房でこしよ・ 滅食・

藏馬

次元の裂目が閉じていく…

ばたん

「幽助え――――――つ――――――！」

飛影

1

次元の裂口が消滅した

蛮鬼

「ちいっ！…まあいい。浦飯幽助、テメエが残つてくれたからなあ」

幽助

「サービスすんぜ？」

蛮鬼

「ぐふふ…そいつあ楽しみだ」

間合いをとり、妖氣を解放しあはじめる二人…

空気が…震える

20 · 逃走（後書き）

次は幽助ＶＳ蛮鬼だー！

21・幽助VS蛮鬼？

蛮鬼

「ぐふふ…浦飯幽助。テメエの戦闘^{データ}、きつちつ取らせて貰つ
ぜ」

そういうと、蛮鬼は小型の機械を取りだし、上方へ放り投げる

幽助

「…？」

すると、放り投げられた機械はみるみるひしに君の悪い羽蟲へ変貌
していく

幽助

「…なんだありや、気持ちわりいな」

蛮鬼

「データ採取機蟲^{アフン}。テメエのデータをとつてくれる記録役
だ」

幽助

「なるほど」

蛮鬼

「…そんじゃまあ…行くぜ！」

蛮鬼が飛び出し、剛腕を振りかざす

幽助

「遅え！」

ボツ

蛮鬼の拳は風を殴る

すぐさま蛮鬼の懷に入る幽助

幽助

「うルア！」

幽助の鉄拳×5が蛮鬼のボディに突き刺さる

蛮鬼

「…がツ…！」

戸愚呂のように吹き飛びこそしないが、予想外の攻撃力に思わずよろめく蛮鬼

幽助

「オラオラオラア」

さらに幽助の拳が飛ぶ

蛮鬼

「ガハツ…ツ！」

モロに顔面に喰らう蛮鬼

幽助

「へりいやがれ！」

幽助の右手に凄まじい勢いで力が集まっていく

幽助
「ツ靈丸！！」

轟音とともに靈丸が蛮鬼の体をつつんでいく

蛮鬼
「…お…おおおおおあ…！」

瞬間

靈丸は弾け飛んだ

幽助
「…な…」

幽助渾身の靈丸は、蛮鬼の妖力の前に敗れさつた

蛮鬼

「ハア…ハア！正直驚いたぜ…まさかこゝまでのパワーがあるとは
な…」

幽助
「ケツ…靈丸を弾き飛ばしことによく無いぜ…」

悔しそうな…しかし嬉しそうな顔の幽助

蛮鬼

「ぐふふ…今のが奥の手だつたようだな」

幽助

「まあな」

蛮鬼

「ならば俺の必殺技も見せてやるつ…鬼道！」

蛮鬼が印を結び始める

幽助

「…妖氣が…集まる」

蛮鬼の両腕に妖氣が集束していく

蛮鬼

「金剛拳！！」

一瞬にして蛮鬼の腕が何倍にも膨れ上がる

幽助

「…でけえ」

蛮鬼

「…ハア！！」

先程よりも速いスピードで蛮鬼が飛び出す

幽助

「ツー！」

ボヒュツ

かろうじて避ける幽助、しかし風圧で体制が崩れる

蛮鬼

「隙ありあツー！」

そこに蛮鬼の蹴りが入る

…ミシツ

ガードした幽助の腕が悲鳴を上げる

幽助

「…がツ…」

さらに蛮鬼の拳が襲つてくる

幽助

「…クソツー！」

グシャツ…・・・

その瞬間、
幽助の右腕は形を失つた

21・幽助VS蛮鬼？（後書き）

幽助負けちちゅうかもねー…（アハハ）

（・）

22・幽助VS蛮鬼？

幽助

「…ぐああああああああああああ…！」

幽助の右腕がただの肉と化す

蛮鬼

「グハハハハ！その程度か浦飯幽助！！」

響きわたる悲鳴を心地よさげに、蛮鬼が高笑いを上げる

幽助

「…ハア…ハアツ…ち…きしょ…」

膝をつき、かつて右腕があつた場所を押さえる幽助

そのとき、2人の闘いを記録していた機蟲『亞雲』が蛮鬼のもとへ戻ってきた

蛮鬼

「…どうやら記録が済んだようだ…」

そう言い『亞雲』を懐にしまう蛮鬼

幽助の周りは血の海と化している

幽助

「…ツ」

蛮鬼

「…テメエも用済みだよ浦飯幽助。まあほつときや死ぬがな」

グフフ…と蛮鬼

しかし幽助からの反応はない

蛮鬼

「…死んだか。さあて、次は桑原和真のデータを取らなきやな」

蛮鬼は部屋を出ようとしない

深い意識のなか…幽助は夢を見てこむ…

？？？

「……………が」

？？？

「…」の軟弱野郎が

…なんだと?誰だコラ…

？？？

「」なんのが息子とは… 我ながら情けねえぜ」

… 親父？

雷禅

「氣づいたかベビー」

… つゝせえ

雷禅

「あんなヤツに負けるなんて… 何考えてやがる」

… つるせえな、見ただろ？あのヤロー 靈丸も効かねえんだ…

雷禅

「だから諦めんのか」

…

雷禅

「テメエにはまだやる事が残つてんじゃねえのか？待つてゐるヤツがいるんじゃねえのかよ」

… やる事… 待つてゐる… ヤツ… ？

雷禅

「チツ… 果てしねえバカが。テメエはそんな事もわからず鬪つてたのかよ？」

……わかんねえよ

雷禅

「それじゃあ負けて当然だよ……いいか?男はな、『田舎』と『市街』
べきもの』がなけりや勝てやしねえんだ」

……おこづけメハの市街のべきものつて……なんだよ

雷禅

「『仲間』だ」

仲間

雷禅

「生きている頃の俺は北神山を守るために闘つてきた。もうひつか
テメエもな」

仲間か

仲間ならいるぜ……大事なヤローービもだ

雷禅

「……」

桑原

蔵馬

飛影

ばたん

ロエンマ

……俺にはたくさん仲間がいる……

雷禅

「そうだ。そいつらを守りたい。そつだる？」

……ああ

雷禅

「……テメヒにやもつたいねえが、最高の女神もつこじゅじゅねえか

……女神？

……？？？

「……幽助」

……幽子

幽子

「約束よ……必ず帰つてきて……」

……へつ……勝手に約束しやがつて……仕方ねえ……守つてやるよ

雷禅
「テメヒには『守るべき仲間』がたくさんいるんだ。それを忘れる
な……」

……ああ！俺はまだ死ねない！

雷禅

「……雷禅様の親心だ。テメヒの体を治してやるよ

……んな事ができんのか？

雷禅

「…俺の魂と引き換えにな」

…魂…馬鹿言つてんじゃねえ！んな事したら生まれ変わりもできねえんだぞ！？

雷禅

「テメエに拒否権はねえよボケ。これからは嫌でも一緒に。仲良く行こうぜ」

…クソ親父

雷禅

「…ふ」

…幽助の意識が戻っていく…

22・幽助VS蛮鬼？（後書き）

らーいぜーん（ＴーＴ）

23・幽助VS蛮鬼？

幽助

「…待てよ」

夢から覚めた幽助が蛮鬼を呼びとめる

蛮鬼

「…まだ生きてい……な、なんで腕が…」

蛮鬼が驚くのも無理はない。たった今潰したはずの幽助の右腕は、完全に元の形を取り戻していた

幽助

「…親父」

蘇つた右腕を眺め、幽助は自分の気持ちを確かめる

幽助

「…俺の…『守りたいもの』…仲間……蛮子との約束…」

蛮鬼

「な…なにブツブツ言つてやがるー今度こそ潰してやるあーーー」

蛮鬼が再び印を結び始める

幽助

「…雷禅のチカラが…伝わつてくわ…」

蛮鬼

「…鬼道…金剛拳…！」

飛び出し、巨腕を突きだす蛮鬼

幽助

「…」

ブオン

空を切る音

蛮鬼

「…なに…？」

蛮鬼の巨腕をつかみ、静かに妖氣を解放する幽助

ボギヤッ

蛮鬼

「ひぎやあああああああああああああ…！」

蛮鬼の右腕が蒸発する

蛮鬼

「…お…オオオオオア…！」

怒り狂つた蛮鬼が左腕で殴りかかる

幽助

「…！」おおお…」

蛮鬼

「あああああああッ！」

幽助の体に触れたとたん、蛮鬼の左腕は消え去った

蛮鬼

「ば…バケモンが…！」

間合いを取る蛮鬼

幽助

「俺にはまだやる事がある。」
「でテメエなんかにや負けてらんね
ーんだよ」

蛮鬼

「…」
「うなつたら…見せてやるぜ！…穿に貫つた新たな能力！」

蛮鬼が妖氣を集中し始める

幽助

「新たな能力？」

蛮鬼

「喰らえ…鬼道…爆碎穿…！」
ばくさいせん

幽助

蛮鬼の口から光の大砲が放たれる

「うおッ！」

うまく避けた幽助だが、爆風により吹き飛ばされる

幽助

「……おいおい……『冗談だろ……』

爆碎穿が当たつた鋼鉄の壁はきれいに蒸発し、消え去つていた

蛮鬼

「死ねえええい！」

第2波を放つ蛮鬼

幽助

「……くそが！」

幽助は右手にチカラを集め、指先を爆碎穿に…そしてその先にいる蛮鬼へと向ける

幽助

「つおお…くらいやがれッ……」

その瞬間…幽助の全身に紋章が現れ、髪が伸び、妖力がはね上がった

幽助

「…靈・丸…！」

明らかに今までの靈丸とは違う輝きを放つた光の塊が撃ち出される
その光の玉は蛮鬼の爆碎穿を飲み込み、打ち消し…蛮鬼めざし進行

していく

蛮鬼

「ああああああああああああああああああああああ

狂ったように爆碎穿を連発するが、光の玉の前には無力であつた

蛮鬼

「いやだあああああああああああああああああツツ……」

ジユツ

蛮鬼は光のなかへ消えていった…

23・幽助VS蛮鬼？（後書き）

雷禅最強！（‘○’）ノ

靈丸を撃ち終ると、幽助の髪は元の長さへ抜け落ち、体の紋章も消えていった

幽助

「一瞬…親父とひとつになつた感じがした…」

どこか嬉しそうに、幽助は洞窟を後にした

そのころ…

断首台の丘

桑原

「…うッ」

穿

「おかえりなさい」

次元刀による脱出に成功した桑原たちだが、幽助と桑原を探していた穿と鉢合わせてしまつていた

ぼたん

「いんなとき…」

穿

「おや？ 浦飯幽助はびひつました？… そつですか、ひとつ置いておきましたですね」

桑原

「こまゝじのテメハの仲間はあの世に向かつてんぜ」

穿

「クツクツク… 私に仲間などこませんし必要もあつませんよ」

飛影

「…」

穿ははおつたマントから小型の機械を取り出し… 放り投げる

穿

「わあ、 桑原和真… データを採取させて貰こますよ」

その機械はみるみるひづけに『データ採取機蟲』『亞雲』へ変化していく

桑原

「… やつしやうりあー 後悔してもじりねえぞ」

桑原が前に出る

藏馬

「… 確かに現状でまともにに戦えるのは桑原君だけだ… しかし…」

藏馬はなにやらびたんこ耳打ちする

ぼたん

「任せな」

そつぱいひじ、てのひらに靈氣を集め、藏馬と飛影の治療を始めるぼたん

藏馬

「耐えてくれ……桑原君……」

桑原

「ひ、あッ……」

靈劍を穿めがけ振り降ろす

穿

「クク……」

穿は右手を剣の腹に当て、軌道をそらした

桑原

「……ッちこ……」

隙だらけの桑原めがけ、穿の時がクリーンヒットする

桑原

「……がッ……」

鈍い音をたてて、桑原が倒れこむ

藏馬

「桑原君……」

飛影

「…バカが。油断しやがつて」

ぼたん

「…」

ぼたんは全靈氣を両の掌にこね、治療を続けている

穿

「…ふむ」

穿は上方の『亞靈』を見上げ

穿

「桑原君、お願いだから本氣を出して貰えませんか」

桑原

「…な、んだと口アリ…」

頭をふんぶん振りながら立ち上がる桑原

穿

「全てのチカラを出して貰えないと困りますよ。私には正確なデータを必要なのでね」

感情のない眼で淡々と話す穿

桑原

「…」、「やめやめ…」

両手に靈剣を持ち、再び斬りかかる

が…

穿

「それはもういいのですよ」

とびかかる桑原に向け右手をかざす穿

すると

桑原

「！！」

穿の掌から衝撃波が放たれ、桑原を吹き飛ばす

桑原

「ぐあッ！」

数メートル先の地面に叩きつけられる桑原

穿

「わからない人ですね。私が欲しいのは貴方の最強の技ですよ」

藏馬

「…次元刀か」

飛影

「アッシュは次元刀を自在に使いこなせるのか？」

藏馬

「…いえ。長いこと平和な人間界で暮らしていた桑原君です。おそらくは…」

飛影

「ちつ。平和ボケが」

不機嫌そうに飛影

その隣ではぼたんが必死の治療を続けている

桑原

「…見せてやんぜ！桑原和真様の十八番！」

靈氣を放ち次元刀を作り出す

穿

「…ほう」

予想外の靈氣に感心する穿

桑原

「…見ていてください…雪菜さん…」

飛影

「…」

愛の戦士・桑原和真が立ち上がる…

24・桑原VS穿(後書き)

愛の戦士(笑)

25・極・次元刀

桑原

「つづやあッ！」

穿

「無駄ですよ」

振り降ろした次元刀は、またも軌道をそらされた

穿

「…！」の程度ですか…」

心底残念そうに、穿は桑原の胸に手をあてる

桑原

「…」

瞬間、再び桑原が吹き飛ぶ

穿

「その剣は飾りですか？ただ振るだけなら誰にでもできるのですよ」

地面に叩きつけられる桑原

穿

「貴方には失望しました…。もひいです」

そう言つて『亞雲』を回収する穿

飛影

「…ち」

藏馬

「桑原君…」

穿

「さて、浦飯幽助のもとに向かいしますか」

藏馬

「ま、待て！」

飛影

「逃げるのか貴様」

未だ治療中の2人がとびかかろうと構える

穿

「逃げる？…クク、今の貴方たちになにが出来ますか。体力だけは回復したようですが…妖力が空ではないですか」

藏馬

「…クッ…」

ぼたんの治療により、体力だけは即座に回復していた2人だったが、肝心の妖気を溜めるのにてこずつっていた。

妖力の自然回復に加え、ぼたんのから送られる靈氣を体内で妖力に変換・吸収しなければいけないのだ。本来ならば、ぼたん一人ではとてもではないが足りないのである

穿

「ナニのお嬢さんも限界のようですよ…クク…」

そのとき、藏馬と飛影の後ろで回復を続けていたぼたんが崩れ落ちた

藏馬

「ぼたん！」

飛影

「…妖氣など必要ない。貴様程度の相手…刀ひとつで充分だ」

飛影が構える

桑原

「…待てよ…」

飛影

「！」

穿

「…」

そのとき、倒れていた桑原が立ち上がった

桑原

「…テメエの相手は俺だろ？がー！」

穿

「ふ…今更貴方になにができます？」

クツクツクツ…と穿

飛影

「そりだ。死ぬぞ」

桑原

「つむせえあ！あいにく俺はなあ…諦めがわりいんだよ…」

次元刀を手に持ち、突進してくる桑原

飛影

「バカが」

穿

「バカバカしい」

呆れた穿が後方へ逃れる。次元刀は空を斬る

穿

「…フ」

穿が衝撃波を出さうと手を出した瞬間

穿

「ぎーやあああああああああああああッ！」

穿の右腕が身体から斬りはなされた

飛影

「！？」

藏馬

「まさか…桑原君」

穿の体からは大量の血が噴き出している

藏馬

「……次元刀を……極めたのか……」

25・極・次元刀（後書き）

桑原最高

飛影

「次元刀を極めただと？」

藏馬

「ああ、次元刀の本来の能力は『次元を斬る』ことだ。今までの桑原君は単純に『空間を斬り、他の場所へ移動する手段』として次元刀を使っていた。だから攻撃方法は靈剣と同じ、ただ斬りかかるだけ」

飛影

「ああ。それが極めるといつなる？」

藏馬

「『次元を斬る』といつことまつまつ…なにも刀そのものを敵に当てなくとも次元を越えて斬る事が可能といつことだ」

飛影

「…なるほどな。つまり離れた場所からでも斬ることができるといつことか」

藏馬

「ああ。この闘い…桑原君の勝ちだ」

桑原

「…なんだ？ なんで当たつてねえのに斬れたんだ？」

自分が次元刀を極めた事に気付いていない桑原

穿

「ぐ……あ、たまあああ！まだそんな能力を隠し持っていたのかッ！」

右腕を失い、完全に冷静さを失した様子の穿

桑原

「？まあいいか……覚悟しやがれ！」

桑原が次元刀を振り回す

穿

「……ひ……！」

その瞬間、穿の体におびただしい量の斬撃が入る

穿

「あああああああああああああああああああああ……！」

むじに程斬りつけられた穿が叫びをあげる

飛影

「……ちり……」

いい所を取られ不機嫌に舌打ちをする飛影

桑原

「俺つて……強い？」

くねりと藏馬の方を睨む桑原。その皿せりハハクンと輝いている

藏馬

「……せせ……」

苦笑する藏馬

飛影

「バカが」

その時、桑原の隙をついた穿が、ビリからか『メス』を取りだし、桑原を斬りつけた

桑原

「……ッ痛う……のヤロも……」

穿の顔面に渾身の一撃を喰らわせる

穿

「……ひ……ひらひらひらひら……もう終わりだ……ひやはははは」

狂ったように笑い続ける穿

桑原

「なにがだコノヤロー。今トドメを……」

その瞬間、桑原の動きが止まる……

藏馬

「……桑原……君?」

飛影の脳裏に跳の言葉が蘇る

『穿のメスを喰らつたら…終わり』

桑原はガクガクと震えはじめ、やがて血を吐き…倒れこんだ

藏馬

「桑原君ツーーー！」

倒れたまま、ピクリとも動かない桑原に駆け寄る藏馬

飛影

「貴様あツーーー！」

飛影が穿に斬りつけた

穿

「……ぐあ……」

穿の体はまつ2つに切り裂かれた

藏馬

「……これは……魔害樹の毒かツーーー！」

飛影

「……毒」

そのときぼたんが田をさまし、桑原を発見した

ぼたん

「桑原君ツーーー、どいとくれーーー！」

藏馬をどかし、動かない桑原に靈氣を注ぐぼたん

ぼたん

「なんの毒か知らないけど…進行を遅らせる」と呟きながらハズだ
よ…」

藏馬・飛影の治療により、ぼたんの靈力は底をついていた

藏馬

「いけない！貴方にはもう靈力が…」

ぼたんは靈力の不足分を、自らの命で補っていた

ぼたん

「…数時間は耐えてみせるよ」

汗をびっしりかきつても、靈氣の放出を辞めないぼたん

飛影

「藏馬」

藏馬

「…なんだ？」

飛影

「魔害樹の解毒はできないのか？」

藏馬

「…毒を持つてゐるところは、おそれく何処かに血清を隠してい
る筈だ」

飛影

「…処刑人の洞窟か

蔵馬

「…ああ、急いで」

桑原とぼたんを残し、2人は洞窟へと戻つていった：

走り出して数分後、幽助と鉢合わせし、桑原とぼたんの元へ向かわせた

幽助

「あいつらの事は任せろ」

そう言った幽助からは、かつてない程の強さと優しさを感じた

処刑人の洞窟

飛影

「…ち。どこがヤツの部屋なんだ」

蔵馬

「一手に別れよう

返事もせず洞窟の奥へと消えていく飛影

藏馬

「…やで」

飛影に続き、藏馬は洞窟の奥へと足を進めていった…

飛影は洞窟の他のところには田もくれず、最深部を田指していた

先程から洞窟奥より流れてくる奇妙な妖氣

飛影の頬を汗がつた

飛影

「！」

洞窟が急に狭くなり、ヒト一人がよつやく通れるほどの通路が続いている

飛影

「…」

通路をしばらく進むと、急に開けた場所に出た。向こうには大きな扉が見える

飛影

「…」

飛影が感じた奇妙な妖気が、扉の向こうから流れでる

？？？

「なにか用かの？」

飛影

「！」

いつの間にか飛影の隣には、小柄な老人が立っていた

飛影
「……この先にはなにがある？」

老人に訪ねる飛影

老人

「この扉の向こうには……穿という妖怪により生み出された最強の兵士、その試作品が眠つておる」

飛影

「貴様、穿の仲間だな」

老人

「ほつほ……まつたく最近の若いもんは礼儀を知らんのう……」

フ……と老人が消え、扉の前に腰かける

飛影

「……」

老人

「まあいいわい。ワシの名は虚空^{ルーム}。この先に眠るモノの番人じや」

飛影

「虚空…？闘神・虚空か！」

虚空

「ほつほつほ、まだその名を知つておるもんがおつたか…」

飛影

「強さを求める者なら誰でも知つておるぜ。広大な魔界においても、最強の種族『闘神』。現存する最古の闘神・虚空。

俺の仲間には闘神・雷禅の息子がいるぜ」

虚空

「雷禅か…懐かしい名…じゃ…風の噂で死んだと聞いたが、まさかせがれがあつたとはのあ」

昔を思い返すように空を見つめる老人

虚空

「……この先へは行かせんよ」

飛影

「なぜだ」

扉に歩み寄る飛影

虚空

「ここに眠るモノは既に生き物ではない。完全な戦闘兵器じゃ……それが故ワシが封じておるのじゃ」

飛影

「それを今から消そうといふんだ」

飛影が扉を開けようと手をかけたその時

虚空の蹴りが飛影の腹へ入る

「……………が……………」

虛空

「どうしてもこの先へ行くというのなら…お主の『つよせ』見せてみよ」

虚空が構え…飛影も構える

飛影

一
チツ
「

163

2人は睨みあつたまま動かない

飛影

「…シツ」

飛影が消える

一瞬にして虚空の後ろをとり斬りかかる

虚空

「…若僧が！」

虚空の体が空へ浮き、バック転の形で飛影の後ろに着地する

飛影

「…な」

虚空の拳が飛影の体をえぐる

飛影

「…ぐあツー」

あまりの衝撃に吹き飛ばされる飛影

虚空

「まだまだじやのつ。その程度の力では大事な仲間すりも守れぬぞ
い」

飛影

「なか… も」

飛影は本来の目的を思い出す。

飛影

「ちつ…」

立ち上がり、パンパンとホコリを払い

飛影

「用事を思い出した。また来る」

そう言い引きかえしていく飛影を、笑顔で見送る老人

虚空

「まつほ…」

狭い通路を歩きながら、飛影は自分の愚行を後悔した

扉の先のモノ…そこから流れてくる妖氣にすっかり目的を忘れていた。

飛影

「…うつ。まいにちある…」

飛影は血清を求め、走り出した…

ルのルル...

飛影とは別ルートを探索していた藏馬

藏馬

「そんなに広い洞窟でせなこせあだ… もハシせんぐ極めてくれよ…」

焦りを感じつつも洞窟を進んでいく

そのとおり

藏馬

「…出でこな」

暗闇に語りかける藏馬

藏馬

「ルの暗闇で貴様の妖氣は嘘く臭い… ル懸呪」

ル懸呪

「…ひひひ…待ってたぜえ？…藏馬あー…」

暗黒の壁からル懸呪が出てくる

藏馬

「…魔晄樹の血清はエリだ」

冷ややかな田で悶り

戸 愚咲

「ヒヤヒヤヒヤーー。そうか、森の毒にやられたかー。どうせ桑原あたりだらう?...ひむ...」

愉快そつこに嘲笑こする戸 愚咲

藏馬

「血清のありかを吐けば、今回は見逃してやる」

戸 愚咲

「...血清は...こりだよ...ククク」

そう言い、試験管をチラつかせる戸 愚咲

藏馬

「よーせ」

戸 愚咲

「やだね」

瞬間、藏馬が薔薇の鞭を作り出す

戸 愚咲

「ひひひ...妖力がほとんど感じられねえなあ?...藏馬ああ...」

戸 愚咲の右指が伸びる

藏馬

「貴様を殺すには充分な量だ」

襲いくる右手を鞭でいなす藏馬

戸 愚呂

「「つるせあッ！あの入魔洞窟での恨み…テメエの体に叩き込んでや
らあッ…！」

そつ叫ぶ戸 愚呂の体がみるみる内に針だらけになる

藏馬

「自分で蒔いた種だらう？」

そつ言い、藏馬が構える

戸 愚呂

「黙れ黙れ黙れえッ！穿により解放された俺の心にはなあ…テメエ
への復讐心しかなかつたぜ…！」

針状の体で突進してくる戸 愚呂

藏馬

「もつ眠れー戸 愚呂おッ…！」

藏馬の鞭が槍のよつに直線状になり、戸 愚呂めがけ飛ぶ

戸 愚呂

「…ッ…！」

肉が潰れる音と共に、薔薇の鞭が戸 愚呂の顔面を貫く

戸 愚呂

「…オ「あッ…」

馬藏

」
…

顔面から鞭を抜くと、戸愚呂の体が崩れ落ちる…

倒れて」んだ」 懸田の体を探る藏馬

藏馬
「...」

試験管を取り出し、「オイをかぞ、中身を確かめる

藏馬
「...よし、懸田」

藏馬が机の上に顔を向けた...その時

戸懸田

「やつせつトメヒサ甘チヤンだぜええッ...」

再生を果たした戸懸田が藏馬にとびかかる

藏馬

「...根を張れ」

瞬間、戸懸田の動きが止まる

戸懸田

「...が...テメヒ...な」をしゃがつた...」

苦つやうて戸懸田

藏馬

「貴様があの程度で死ぬとは誰も思つてないさ……試験管を取り出した時に『種』を植えさせてもひつた」

戸愚呂

「……な……に……」

戸愚呂の体がビキニと音をたてる

藏馬

「植えた植物は『呪縛草』。貴様の体には呪縛草の根が張り巡らされた……あとは……」

戸愚呂

「……や、やめてくれ……。も……もとほと言えさせ穿の野郎が持ち出した話なんだよ……な?俺は悪くねえ……全部穿が悪いんだ。だから助けてくれよ?」

藏馬

「……」

戸愚呂に近付く藏馬

戸愚呂

「助けてくれよ……藏馬あああツーーー」

近付いてきた藏馬を戸愚呂の針が襲いつ

しかし、それを鞭で斬り払つ藏馬

戶愚呂

」
：
ひ
！

藏馬

「咲け」

ボンツ

破裂音と共に戸愚呂の体が引き裂かれ、体内から植物が溢れだす

植物はバラバラになつた戸愚呂を巻き込み、その場に根を張り、花を咲かせる

藏馬

「感謝するぜ、愚咲。お前の醜い心が、こんなに綺麗な花を咲かせてくれた」

そう言い残し、藏馬は去る

あとに残るは一輪の美しい花……

飛影と藏馬が洞窟を去ったあと、処刑人の洞窟に入るひとつのかげが
あつた

穿

「…ククク…まだだ…まだ私の計画は終わってなどいない…」

半身だけの穿がズリズリ音をたてながら這つていく

穿

「…ここまで来れば…」

そつ言こどこからカリモコンのようなモノを取り出す

穿

「ククク…私が…魔界の…支配者に…」

ピッ

リモコンのスイッチが押される

ピピピピ…

大地が震えはじめる

洞窟最深部では…

虚空

「…穿め…遠隔操作器を造りおつたか…」

虚空の後ろで、巨大なトビラがミシミシと音をたて、破壊されていく

虚空

「…田覚めおつたわい」

壊れかけたトビラを突き破り、巨大な腕が現れる

虚空

「…化け物め！」

トビラが完全に壊れると同時に、洞窟の崩壊が始まる

虚空

「ぬう…」

崩壊により次々と落ちてくる岩をかわしながら洞窟を脱出する老人…その視線は常に魔人を見据えていた

その…

藏馬

「…」それで大丈夫だ

桑原に血清を『え、とつあえずの目的を達成した一同

幽助

「とつあえず一安心だな」

ぼたん

「ふう…さすがのアタシも疲れたよ…」

飛影

「ふん。世話のかかるヤツだ」

やつひこ、じいかへ行くひとする飛影

ぼたん

「おやへどこに行くつもりだい？」

ぼたんがそれに気付く

飛影

「……用事があるからな」

藏馬

「……」

ゾクッ

幽助

「……なんだ……この妖氣は……」

藏馬

「……妙な感じの妖氣だ……」

飛影

「これは……」

ぼたん

「知つてるのかい？」

その場にいた全ての者が震えあがる程の妖氣が満ちていく……

飛影

「……魔人……」

幽助

「魔人？」

？？？

「その通り」

声に反応し、後ろを振り返ると……そこには穿の半身があった

穿

「……ククク……私を完全に消滅させなかつた事を後悔するのですね……」

ニヤニヤとうすら笑いを浮かべながら、半身は話しが続ける

穿

「計画よりは大分早いですが……魔界を征服するには貴方達が一番の障害だと判断しました。私も贅沢は言つてられない状況なのでね……。試作兵を使わせて貰いますよ」

藏馬

「試作兵？」

穿

「ええ。私がこれから造り出そうとしている改良型とは違い、私が試験的に産み出した制御不能の駄作ですよ。最も……その戦闘力だけは改良型を遙かに凌駕していますがね……」

ぼたん

「そんなのを放つて……アンタも無事では済まないだろ？」

穿

「くく……良いのですよ。制御など出来ずとも……私は悟りました。私の理想の魔界を手に入れるには……一度全てを破壊し、その上に創

造すれば良いとねえ！」

幽助

「狂つてやがるー！」

穿

「ククク…ひひひ…アーッハッハッハーー！」

ボンッ

飛影の炎により消え去る穿

飛影

「カスガ」

幽助

「おいぼたん！オメエは桑原連れて煙鬼のオッサンといひつてるー！」

ぼたん

「あいよ。3人とも死ぬんじゃないよー！」

幽助

「ああー！」

藏馬

「ええー」

飛影

「…」

3人は処刑人の洞窟へと向かう…

31・虚空VS魔人

洞窟は跡形もなく崩れ去った

そこには一人の老人と…巨大な…不気味な『なにか』が立っている

虚空

「望まれずに産まれし魔人よ…哀しき魔人よ。この鬪神・虚空が永遠の眠りにつかせてやるつが…」

虚空の前には、とにかく巨大…緑色の肌に所々に茶色い体毛を生やし、額には3本の角を生やした1つ目の魔人が立ちはだかる

魔人

「グロロロ…」

穿

「それは困りますねえ」

虚空の横から、穿の半身が語りかける

穿

「さあ！試作兵よ！本能に任せ全てを喰らいくつすのです！…」

虚空

「本能じゃと？あやつに本能などありやせんわい…お主が造りだし、破棄した産物なんじやからのう」

穿

「…ククク…確かに、私はあの試作兵に本能や感情といった類のデータをインストールしていませんでしたねえ…しかしこの遠隔操作器の電波に乗せて、『命令』をヤツの脳に焼き付ける事は可能なのですよ」

虚空

「…命令じやと?」

穿

「ええ。『ぐぐぐ』単純な『命令』ですよ…。『全てを破壊せよ』…

それだけです」

虚空

「愚かな…」

虚空が消える、再び姿を現した時には穿の体は粉々の肉片と化していました

虚空

「…わて、いやつばかりはワシの力でも難しこの…」

ため息をつき、構える老人

魔人

「グロロロアアアツ！」

虚空の殺気に触発された魔人が動き出す

虚空

「来い！哀しき魔人よ！」

魔人の眼が鋭く光る

虚空

「ムツ！」

ビッ

瞬間、魔人の眼から熱線が放たれる

素早い動きでそれを交す虚空

すかさず魔人の腕が襲いくる

虚空

「ぬう…」

熱線をかわした状態から伸びてきた腕を足場にし、魔人の体を駆け
登る

魔人の目の前へ跳び

虚空

「闘・龍・紋！」

虚空の体が一瞬光り、十字の焼け跡が魔人の眼球につく

魔人

「アギヤアアアアアアアアツ！」

どうやら痛みは感じるらしく、激しく暴れる魔人

老人は更に追い討ちをかけるべく、再び魔人の体を登りだした

しかし

気づいた時には魔人の姿はなく、老人はひとり宙に浮いていた

虚空

「……な……」

刹那、老人の体に衝撃が走り、地面へ叩きつけられる

虚空

「ガハッ！」

一体何が起こったのか理解できない鬪神

老人が立ち上がったその時、信じられない光景があった

あの巨体からは想像がつかない程のスピードで周囲を駆け回る魔人

時には走り、時には遙か上空へと跳んでいる

虚空

「なんという身軽さ……なんというスピード……それにこのパワー！」

老人は絶望した。力ではかなわなくとも、スピードで覚乱し、隙をつき崩していけると確信していた……しかし、魔人の能力は老人のそ

れを全てにおいて上回っていたのである

魔人は立ち上がった虚空を発見すると

魔人
「グロロロオアツ！」

自慢のスピードで襲つてくる。両の手を振り上げ、いつでも振り降ろせるようにして…

虚空

「間に合わぬ！」

先程の一撃で、虚空の骨はほぼ全て砕けていた。本来ならば、立つことなど奇跡に近いダメージである。それでも立つことができたのは、闘神としての誇りとプライド…なによりも老人の根性に他ならないのである

ドンッ

魔人の両腕が虚空に振り落とされる…

地面には魔人の腕が深く突き刺さっている

その横で、老人はからうじて生きていた

虚空

「…速いのう…」

先程の攻撃を倒れこむよつた形で回避した老人だったが

虚空

「むう…あのスピードをどうにかせねばな」

この強大な魔人をどのように攻略するかを必死に考えていた

魔人

「グロロロ…」

地中深くえぐり込んだ両腕を引き抜いた魔人が、虚空を発見する

虚空

「まつたく…眼を焼かれておるとここのによくもまあ…ワシの居場所がわかるもんじゃのう」

呆れたように、しかし感心したように呟く

魔人が再び両腕を振り上げる

虚空

「…ふう…」

魔人が腕を振り降ろすと同時に、老人が回転を始める

虚空

「ぬ…お・お・お・おおおおおおおお…」

その回転は、一瞬のうちに巨大な竜巻へと成長し、魔人の攻撃を迎え打つ

ガギヤギヤギヤギヤ

鋼鉄がぶつかり合つような音を出し、火花を散らせる腕と竜巻

バキインツツ

わずかに竜巻の力が勝り、魔人の両腕が弾き飛ばされる

虚空

「今じやア！」

ババツと体を起こし、魔人の真下へと移動する老人

虚空

「喰らえい！闘龍拳・回転氣龍！…」

拳を天高くかざす虚空。すると拳が黄金に輝き…その光りがやがて黄金の龍となり回転を始める

魔人

「グギヤアアアアアアアツ！」

黄金の龍が、回転しながら魔人の両足を喰らっていく

魔人

「ガアアアアアアアアアアツ！！」

ミキミキと音をたてて魔人の足が潰れる

踏み潰されぬよう、イソイソと抜け出す虚空

轟音と共に崩れ落ちる魔人

しかし

虚空にはもう立ち上がる力がなかつた

全身の骨という骨が砕け、その上黄金の龍を呼び出した事により更に体に負担をかけてしまつっていた

ピクリとも動かない虚空のニオイを見つけた魔人が、大きく口を開け…エネルギーを集束していく

虚空

「…ここまでか」

轟音と共に虚空めがけ魔人の口からエネルギーの塊が撃ち出される

かつてないほどの爆発、轟音が鳴り響く…

煙が舞い上がり、辺り1面を満たしていく。：

33・刹那の炎たち？

徐々に煙が晴れていく…

虚空

「お主…」

虚空の前には黒髪の逆毛少年が立っていた

飛影

「貴様との勝負がまだだ」

虚空

「…バカモンが…」

幽助

「なんだなんだあ？まさか闘つてたのじいさんかよ」

藏馬

「幽助。この方は『老体ながらオレ達より遙かに強者だよ』

老人の目の前には3人の『若僧』が立っていた

虚空

「…お主らのような若僧が敵う相手か…」

幽助

「あ？何言つてんだじいさん…敵う敵わないじやなくて勝たなきゃダメなんだろーが」

藏馬

「…ふ」

飛影

「その通りだ」

そう言い、飛影が魔人めがけ飛び出す

虚空

「…バカモンドもが……ワシが援護する！遠慮せず暴れて見せよ！」

藏馬

「ええ…鬪神・虚空様。お話は飛影からうかがいましたよ。あなたの御力になれる事を誇りに思います」

そつ言い、藏馬も飛び出す

幽助

「親父の…雷禅と同族なんだつてな。」

虚空

「…つむ。雷禅に鬪いのノウハウを呑き込んだのはこのワシじや」

幽助

「…そうか。雷禅は死んだ。けどな…雷禅は生きてるぜ？…今は…俺と一緒にな！」

虚空

「 ゆけいー雷禅の息子よー雷禅の生れ代め...見せてみよー...」

幽助

「 ...おうー...」

幽助も駆け出す。

残る靈丸は... 2発。

虚空により脚を潰され、動きの取れない魔人だつたが、向かいくる飛影・蔵馬・幽助を迎撃つため... 体中の砲台を開いていた

飛影

「 ...ちツー！」

無数の砲台から繰り出される無数のエネルギー弾を器用にかわしつつ、魔人の頭部に近付く飛影

しかしそのとき、魔人の口が大きく開いている事に気付いた

飛影

「 ...アレカツー！？」

ドンッ

再び轟音が鳴り響き、魔人の口からエネルギーの塊が撃ち出された

藏馬

「飛影ッ！」

虚空

「小僧ッ！」

幽助

「…」

飛影

「…ふ。…俺をなめるなよ化け物。邪王炎殺黒龍波アアアッ！」

飛影の右腕より暗黒の炎龍が喚び出される

ボンッ

爆音とともに黒龍はエネルギー弾を喰らい戻した

虚空

「…なるほど…ワシを助けたのもあの炎龍か…たいした代物じゃ
わい」

飛影

「ツ はあツ！！」

燃え盛る剣を魔人の頭へと突き刺す

飛影

「おおおおおおツ！！」

突き刺した剣を通して、邪炎を魔人の体内へと送りこむ

魔人

「ぐぎやああああああああつ！！」

決して消えない邪炎を体内に浴び、もがき苦しむ魔人

しかし

ピカツ

魔人の角に激しい雷が轟き落ちる。それをモロに受けた飛影が吹き飛ばされる

飛影

「ガはツ！」

34・刹那の炎たち？

宙へと投げ出される飛影…その体は雷により焼け焦げていた

虚空

「……ぬん！」

虚空が念を凝らす、すると飛影のダメージが癒えていく

無事着地した飛影

飛影

「…なんだ？ 虚空の仕業か？」

蔵馬

「頼もしい援護だこと…」

蔵馬が前進を続ける。手には薔薇の鞭。蔵馬も飛影も、通常の半分程の妖力が戻っていた

魔人

「グロロロおツー！」

魔人の砲台から無数のエネルギー弾が発射される

蔵馬

「ツー！」

激しい爆発

虚空

「むう…」

飛影

「…ふん」

爆煙のなかから銀髪の妖狐が現れる

背中に浮遊樹を生やし…自由に空を駆け抜ける

蔵馬

「…ハアアアツ！」

薔薇の鞭が生き物のように動き出し、魔人の砲台を次々と破壊していく

魔人

「グロロロおおツ！」

魔人の角が一瞬光る

蔵馬

「…！」

力ツ

瞬間、蔵馬の体を幾閃もの雷が突き抜る

蔵馬

「…ぐああツ！」

そのまま地面に叩き付けられる…そして

ドンッ

魔人の両腕が振り下ろされる

ドンッ
ドンッ

何度も藏馬を叩き潰す魔人

幽助

「やめろおおおッ！」

飛影

「貴様あああッ！！」

幽助と飛影がそれぞれ魔人めがけ『撃つ

魔人

「！」

飛影の黒龍波が魔人の右腕に喰らいつく

魔人

「ぐぎやあああああああああつッ！！」

幽助の真・靈丸が魔人の左腕を引きちぎる

魔人

「ウ、ゴオオオオオオオオオオあツ！！」

幽助の髪は伸び、体には紋章が刻まれている

虚空

「ほつ…やはり雷禅の息子か…」

その姿を見た虚空

虚空

「そつくりじやわい」

魔人の腕に喰らいついた黒龍が、さらに力を増していく…喰いつかれる

魔人

「グロロロオオオオオツ！！」

魔人の3つの角が怪しく輝く

すると無数の雷がまきおこり、すべてに襲いかかる

飛影

「チイツ！」

蔵馬

「クツ！」

幽助

「つおツ！」

それぞれから「うじて雷をかわすが、避けるのに精一杯で全く攻撃に入れない

虚空

「ぬうひひひ...」

虚空が全妖力を開放する

すると、幽助ら3人の体を薄い膜が包みこむ

幽助

「！...じいさん」

飛影

「...余計なことを」

藏馬

「...ふ...」

虚空

「その膜がある限りはあやつの雷など無力じゃわい...」

幽助

「やるなじいせんつ... 決めるぜ!!あッ...」

藏馬

「ええ。 ここの闘い... 終わらせましょ!!」

飛影

「...ふん。 トドメは俺が刺す!」

魔人

「グロロロオオオオオツー！」

『はああああああああああああああ』

35・刹那の炎たち？

魔人の雷は次々と幽助たちを襲う。

しかし、虚空の膜によりその全てが無力化される

幽助
「こりやあスゲーゼ！」

藏馬

「さすがは闘神。妖力も桁違いですね」

飛影
「……ちつ」

魔人が大きく口を開く

飛影

「……くるぞー！」

藏馬

「任せろ。2人は攻撃直後を狙ってくれ」

幽助

「ああ！頼むぜ？藏馬」

右手に全妖力を集束する幽助

飛影

「一撃で決める」

黒龍を喰らう飛影

魔人

「グロオオオオオオアアアアツ！－！」

最大級のエネルギー弾が放たれる

藏馬

「つおおおおおおッ！－！」

全妖気を解き放つ藏馬

エネルギー弾が幽助たちに近づく

藏馬

「喚樹！…改良妖壁樹！－！」

どこからか巨大な『壁』状の植物が現れ、エネルギー弾をその身に受ける

藏馬

「耐えろおおッ！－！」

ビキッ…

蔵馬

「…ぐつ…」

『壁』の植物にヒビが入る

蔵馬

「…あああああああああつ…！」

植物の『壁』の後方に、新たに妖壁樹が現れる

エネルギー弾が消えた

ほぼ同時に蔵馬の体が南野秀一に戻る

幽助

「蔵馬！」

蔵馬

「…平氣だ…妖力を…限界以上に使用した反動だ…」

飛影

「…幽助！決めるぞ！！」

幽助

「…ああ」

再びエネルギーを集め始める魔人

飛影

「させるかあああああツ！！」

『蔵馬が命がけでつくってくれたチャンス』

飛影

「…無駄にはできん！…喰らええ！…邪王炎殺… 黒龍波あああ
あツ！…！」

轟音とともに最強の黒龍が放たれる

幽助

「…雷禅…。守ってみせるぜ…仲間を…強子との約束を…！」

『…ふ…かましてやれや。バカ息子…』

幽助

「…へつー行くぜクソ親父いあ…！…くらいやがれつ… 精・丸ん
ツ！…！」

轟音とともに、最強の靈丸が撃ち出される

全妖力をこめた黒龍と靈丸

魔人

「グロロロオオオオオオオオオオオオツ！！」

カツ

一筋の光が魔人を貫く

魔人

「……」

虚空

「見事なり！」

ドオオオン……

魔人の頭は吹き飛び、体が崩れ落ちる…

幽助

「…や…やつたぜ！」

飛影

「…ふん」

藏馬

「魔人は…滅んだ…」

こうして最凶の魔人は消滅し…穿の野望は失敗に終わり、戸愚呂の復讐も達成されることなく…幽助らにより終わりを告げたのである

35・刹那の炎たち？（後書き）

長かった幽助たちの話も次回でラスト……長かった……本当に長かった……
もう感想は長かったしかでこない……
ラスト。頑張ります！

Last・『刹那の炎』

虚空

「では。な」

幽助

「ああ…長生きしそうよ。じーさん」

虚空

「ふん。若僧が」

あの闘いから3日間、幽助・飛影・蔵馬…あと虚空は眠り続けた。4人とも妖気の使用量が限界を突破していたらしい…倒した魔人の側で眠っている4人を救出したのは、こつそり魔界に来ていたコエンマであった

それから3日後。闘神・虚空は魔人監視の役目を終え、次の危険妖怪の封印場所へと旅立つて行つた。もちろん全身骨折のままで

幽助

「…なんだかんだであのじいさんが一番タフだな」

蔵馬

「ええ…本当に」

ケラケラと笑う2人

飛影

「ふん。」

桑原

「ん？ おー[飛影]、どー[行くんだよ」

飛影

「……あのジジイとの戦いがまだだ」

ぼたん

「……じーちゃん全身骨折でしょ」

飛影

「……」

藏馬

「考えてなかつたみたいですね」

飛影

「……ふん」

不機嫌そうにじーかへと消えていく飛影

桑原

「わかんねーヤローだ」

毒にやられた桑原だったが、血清を打たれた数時間後には完全に復活するという驚異の回復力をみせていた（無駄に）

「ヒンマ

「つむ。では帰るか！」

ぼたん

「帰ろうかねえ」

藏馬

「帰りましょう」

桑原

「雪菜さんつ」

幽助

「ああ……帰ろひせ……」

隊長

「……では開きますよ。」

境界トンネルが口を開いていく…

幽助

「親父…雷禅。行くぜ…人間界に…。童子との約束を守りによ。」

人の一生とは短く儂いものだ。

だからこそ人は人を思い…信頼し…愛する。『仲間』をつくる。大切な人と『約束』を交す。これらは時に激しく、強く燃え上がるものであり、時にたやすく消え去るものもある。自分達人間は…この一瞬を生きる炎を守るため、たやすく消したりしないために生きていく…。この『刹那の炎』を守るため…生きていくのだ…。

THE END

あざーつした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7419a/>

幽遊白書～刹那の炎～

2010年10月10日02時03分発行